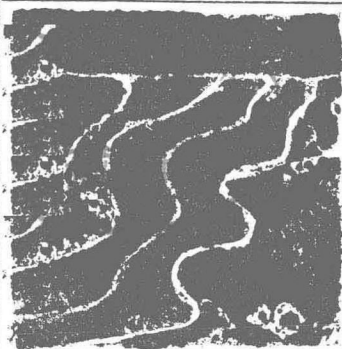


渚の光景

西田直一郎

渚の光景



西田直二郎

西田直二郎、昭和十一年、日本橋、高知県人。



52.8.15 書齋にて

発行者 西田直二郎

著者 西田直二郎

昭和52年10月27日

渚の光景

製作 名古屋丸善出版サービスセンター

料亭 菊川^ゝの女将^{おかみ}から、次のような知らせの手紙があつた。

先生

其の後お元気で御研究にお励みのことと存じます。一月に母上様がお亡くなりになられ、おいおいお寂しいことと思ひますのに、その上、千乃のことで御心配をおかけしましてはと、随分あれこれと思案をしてまいりましたが、私の力におよびませず、苦しみながらお手紙をする次第でございます。どうかお赦し下さいまし。

さて、千乃のことでございますが、昨夜私達が寝ついてしまった頃に、ひそ

かに家を出ておりました。あちこちと心当たりを捜してみましたが、どこにも立ち寄った気配はございません。もしかすると、上京したのかも知れません。そんな予感もいたします。ほんとうに困ったものでございます。先生、千乃が立ち寄った際には御一報下さいまし。すぐに諭しに参上いたします。私がいたりませず、このようなことになりましたことを、なにとぞ容赦下さいませ。暑さの厳しい折から、くれぐれも御自愛下さいまし。

野口先生

里

かしこ

里の手紙は、白紙に筆字で美しくしたためであった。野口は読み終えた手紙を書斎の机の書籍の上に置いた。

「悲しくなると、ふるさとの海を見に行きますの……」

野口は、千乃が二年前の秋、淡路島へ行く船の中で話した言葉を、ふと思いついた。ソファに身体を沈めた野口には、素直で明るかった千乃の表情が浮んだ。

「いや、東京へ来ることはあるまい。今頃、淡路島の阿那賀のホテルに泊つて、海へ遊びに出ているだろう」

野口はそう思った。

「千乃の性格なら多分心配はあるまい。二、三日すれば、女将から朗報が届くだろう……。とにかく、二、三日待ってみよう」

と考えた。

野口は書斎の前の内縁の端へ出た。裏庭の塀の上まで迫っている菩提寺の森の楓、樺、榆、銀杏等の深緑が、真夏の日射しを受けて光りながら踊っていた。それが、なぜか自分の感情に似ているように思えた。その中に、千乃のあの頃の笑顔が、何度か浮かんで消えた。

野口が、徳島の夏期講座に出向いて、二年目のことであつた。講座が打ち上げになった夜、今年も仲間六人と料亭へ招かれた。夜が更けて、酒がまわって場が賑やかになった頃であつた。

「千乃と申します。どうぞ宜しく……」

仲間と話に夢中になっていた野口が、声に気付いて振り向くと、水色地に白と赤ぬきの菖蒲の紹友禪を着て、紗の帯を締めた小柄な女が、畳の上に両手を揃えて置き、深く頭を下げていた。

「お座敷へ出さしていただきますのは、今夜が初めてですの。初酌をお受けになつて下さいませ」

微笑んでもの柔らかく差し出した九谷焼の銚子の先が、微かに震えているように見えた。野口と視線の合った可憐な目が、しつとりと濡れて光っていた。野口は反射的に男ずきのする女だと思った。

「あなたのようなチャーミングな女ひとに、初酌をいただけるとは……………幸運だね」

「お世辞のお上手なこと……………」

ちよつと俯うつむいて含羞うづもんだ。

「いや、お世辞じゃない……。本当だよ。だって、チャーミングな女ひとに初座敷と初酌が付けば、これ以上の嬉しい宴会はないだろう。酒を飲む機会が多いの

に、初座敷の女に出会えたのは初めてだね。」

野口は酒の加勢でさりと云った。そして、盃を一氣に空けて千乃に差し
た。

「女将さんは、立派な先生方だからと言って、初座敷を勤めさせてくれました
の」

「立派は立派でも、どっちの方が立派なのか分らないぞ」

隣りの白髪の方が言った。千乃は笑いながら野口がなみなみと注ぐ酒を少し
も動じずに受け入れた。それから、千乃は会釈してそつと飲み、も一度そつと
飲んでから、白くほっそりとした両指の中の盃を深く傾けていった。

「なかなかいけそうな飲み振りだ。じゃ、もう一杯、僕の心の酒、いや愛の酒
としておこう。それをこれで受ていただくろう」

野口は酔っているなと自分でも思った。野口は煮物の入っていた漆器の赤碗
を千乃の前に差し出した。

「死んでも知らないわよ……。でもいいの。いただきます」

千乃は平然として受け取った。

「それに一杯ぐらい飲んでも死にはしないよ。人間というやつは、もっと丈夫に出来ているものだ」

野口は少し舌が縄れた。

「ほんとは、これに十杯ぐらい飲んで暴れてみたいの」

「う、そんな時にはこの立派な先生に頼むといい……。丁寧に手ほどきをして下さる」

千乃はお碗を持って笑った。野口は酒を注ぎながら、一瞬躊躇った。なみなみと注ぐか、それとも少しで止めておこうかと迷った。千乃は微笑みながらじつと見ていた。お碗に三分の一は注いでもいいと思った。

「なかなか気が合いますな」

右隣りの黒眼鏡の禿げた男が言った。

「今からが見ものですぞ。美味^{うまい}肴はゆつくりと味わいたいものです」

野口は得意顔で高笑いした。

「千乃さん、御迷惑でなかったら、一気に空けて下さい。酔っ払ったら、僕が優しく介抱してあげます」

野口は、千乃の切れめのはっきりしている、丸い澄みきった目を見た。

「これぐらいの量でしたら、私にも飲めますの」

「じゃ、ぐいっといきましよう」

左隣の白髪の仲間が言った。

千乃は、正座した背をすらりと伸ばして、さらりと飲んでしまった。お椀を受けていた小さな両手の動きに、野口の目は引きつけられた。

「いやいや、見事な出来映えですな」

白髪の仲間が掌で膝を叩きながら言った。

野口は、その一瞬白蓮の花を思い出した。濁った池水と、白蓮の花を印象的に対照させていた。端正さと可憐さが野口にそんな光景を思い浮かべさせた。でも、一方では、野口は千乃の行為に拍手をおくっていた。

「何故か今夜のお酒は美味^{おい}しいの……」

「かなり飲める口だな」

野口はいつの間にか千乃のお碗を受けていた。

「いいえ、今までにお酒を飲むことはありませんでしたの」

「ほう、それにしても飲みっぷりがいい」

「そうかしら……」

千乃は、俯いて真紅の唇に白い手を添えて微笑んだ。

千乃の傍にいた年増の女が、千乃に耳打ちした。千乃は軽く頷いてから断わりを言つて場を離れた。野口は、去つて行く千乃の後ろ姿を見おくりながら、もうここへ戻ることはないだろうと推測した。

耳打ちした女に、野口はいきなり、

「あの子、ここのお嬢さんだろうか？」

と訊いてみた。

「いいえ、淡路島で生まれたらしいの。いい子でしょう？」

と言つて、斜め使いの意味ありげな目付きで微笑した。

「う、あの女は、これから随分稼ぐだろうね」

野口はそっけなく言った。目が重くなるような酔を感じた。

「先生のお好みのタイプなんでしょう？」

「そう……、いい女が傍にいと、飲めない酒でも、つつい度を越してしま
う」

「お粗末でした」

女は膝をさつと横向けて、顔をしかめて背けた。

「いや、君をも含めて言ってるんだよ」

女は素早く元の姿勢に戻って、微笑しながら、

「じゃ、一杯お受けになって下さいまし」

女は尻上りの声で言って、銚子を差し出した。野口は受けた酒を一気に空けた。野口は盃を女に差し出しながら、

「これから、君と飲みやいごっこをしようか」
と言ってみた。

女は酒を受けながら、

「とっても先生には適かないせんわ」と言つた。

「いや、そんなことはないだろう。僕は酒には弱い。気分で飲むほうだ」

「私は、もう酔つてますのよ」

「僕ももう限度になっている」

話に夢中になっているところへ、千乃が戻つて来た。何か小用であつたのだろう。仲間の中では、かけ離れて若い野口の前に、千乃はまた座つた。

「ね、千乃ちゃん、先生が、これから飲みやいごつこをしようと言つてるの」

「そ、でも君には負けるだろ」

「私、まだ全然酔つてはいないのよ」

「強いね、君は……。ジャンケンに負けたら、これに一杯飲むことにしよう」

「ひゃあ……」

千乃は目を丸々させて、両手で顔を蔽つた。野口はお碗を差し出して

た。

「じゃあ、これにしよう」

野口は盃を持ち上げた。

「十回負けた者は、その次ぎから負けるごとに上着をじゅんじゅんにとっていくことにする……」

「面白いわね、二十回も三十回も負けたらどうするの……」

「最後にヌードになってしまえばいいじゃないか。もしかすると、僕がヌードを披露することになるかも知れない。面白いじゃないか」

野口は自分でも酔っているなと思った。千乃は、真剣な顔になっていた。

「野口先生、みなさんが賛成ですぞ」

右の方から声がかかった。拍手が起った。

「さあ決まりましたぞ」

白髪の先生が言った。

「千乃さん、二十回まけた方は、この中でヌード踊りをやることにしよう」

野口は声を出して笑ったが、狼狽している千乃を見て、酔ってしまふと邪険になる自分を知って、ほどほどにしないといけないと思った。

「え、私、ヌードになるぐらいなら平気よ。でも、みなさんの前でヌード踊りをやるのはいやです」

「ヌードになってしまえば、後はこうするだけだよ」

右隣の男は、立ち上って両手を前に差し出し、腰をくねらしながら回わした。その度に太いズボンの上にバンドが波のように動いていた。

千乃は、驚いたように目を大きくして見上げていた。その目が、赤くなつて潤んでいた。そこへ年増の女が来て、千乃に耳打ちした。千乃は軽く頷くと、酔で賑やかになった客の間を、腰を沈めるようにして出て行つた。それが、千乃との別れになった。それから間もなく酔っている仲間と一緒に、夜更けの町を二次会のバーへ移つた。カウンターに向つて座ると、もう身動き出来ないようなバーであつた。そこで仲間は、向いの女を相手に陽気に騒いでいたが、野口は楽しく遊べなかつた。ふと千乃の目が浮んだ。も一度、菊川へ戻

って、千乃と二人きりで酔ってしまいたいと思った。

翌朝九時の汽車に乗るため、野口達が駅に着くと、昨夜の女達六人が、とり澄ました装いでタクシー降車口に待っていた。千乃はそこの中にはいなかった。女将は野口を見ると、白く肥った顔一面に笑を湛えて近づいて来た。

「先生、昨夜不馴れな千乃をおつけしまして、大変失礼いたしました」

と丁寧に謝辞を述べた。発車の時刻までに間がなく、歩きながらの会話になった。

「いや、楽しく遊びました。出来れば機会をつくって、また、お伺いしたいと思っております」と言った。

「え、その日を楽しみに、お待ちしております」

「その節は宜しく。千乃さんに宜しく伝えて下さい」

ホームへ出てからも、昨夜の千乃のことに話題が集まった。発車のベルが鳴った。野口は慌てて列車に飛び乗り、会釈だけで別れになった。

東京に戻った翌日、野口はまた秋田へ飛んだ。野口にとって、夏休みは稼ぎ

時であつた。夏期講座のある日本の各地を飛び回つた。その旅先でも、美しい女には度々出会つたが、何故かその度に、千乃の可憐な表情が浮んで来た。九月近くなつて、東京に戻つた夜、野口は仕事先や友人知人達の郵便物と一緒に菊川^{スズカハ}の女将からの手紙を受けとつた。残暑見舞をかねた先日の謝礼であつた。多忙な野口は、多くの仕事を敏速に処理する手段に、よく電話を使つた。野口は女将に架電の必要もないが、なんとなく千乃の声を聞きたい氣分で、早速、書斎の机の受話器を取つた。

「もしもし、先日の夏期講座の野口です」

そこまで話すと、

「あつ、野口先生。里でございます。過日は大変ごひいきになりました。お礼申し上げます」

「こちらも楽しく遊ばさせていただきました」

野口はどうしてか、なんとなく堅くなつてゐる自分に氣付いた。

「ご丁寧なお手紙をありがとうございます」